

【旧約聖書日課】出エジプト記 3章1～15節

¹モーセは、しゅうとであり、ミディアン人の祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに來た。²そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。³モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」

⁴主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、⁵神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」⁶神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

⁷主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶきに見、追いつく者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。⁸それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上げる。⁹見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。¹⁰今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

¹¹モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」

¹²神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」

¹³モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」

¹⁴神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだ。」¹⁵神は、更に続けてモーセに命じられた。「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。これこそ、とこしえにわたしの名、これこそ、世々にわたしの呼び名。」

【福音書日課】ルカによる福音書 20章27～40節

²⁷さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来てイエスに尋ねた。²⁸「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。」

²⁹ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないうまま死にました。

³⁰次男、³¹三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さずに死にました。³²最後にその女も死にました。³³すると復活の時、その女はだれの妻になる

のでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」³⁴イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、³⁵次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしい

とされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。³⁶この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。³⁷死者が復活する

ことは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。³⁸神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」

³⁹そこで、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」と言う者もいた。⁴⁰彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。

道をそれて、聖なる場所へ

わたしたちの教会は、今日の日を「オープンチャーチ」と銘打って、多くの皆さんにご案内を差し上げてきました。特別なゲストをお招きしているわけではありませんが、心ばかりのおもてなしやイベントをご用意して、おいでいただいた方とこの日一日を分かち合いたいと考えております。そのことを通して、何よりも、わたしたちの教会のこと、わたしたち自身のことを、皆さんにご覧いただきたいと願っているのです。

教会は、信者である教会員にしてみれば、毎週日曜日には必ず礼拝が行われているところで、そこに出かけて行って当たり前の場所、であるかもしれません。けれども、信者ではない方々にとっては、なかなか縁のない遠い存在であるというのが、おそらく実感なのでしょう。中には、「教会は敷居が高い」とおっしゃられて、おいでになるのを避けているという方もあるかもしれませんが、ほとんどの方々にとっては、そもそも敢えて行ってみようと思ひもしないところ、というのが本当のところなのではないでしょうか。普段の生活を過ごす中で、教会の存在は、特別に思い出すようなところではなく、道すがら通りかかっても素通りしてしまうようなところなのでしょう。実際、「オープンチャーチ」の機会に限らず、ごく近所の方がお寄りくださって、「何十年もここに住んでいるけれども、教会の中に入ったことがなかった」とおっしゃられることがあります。それだけ、教会においでになるということが、普段の生活とはかけ離れたことだ、ということなのでしょう。

今日、ここにお出でくださる方の中にも、もしかすると、そのような方がいらっしゃるのではないのでしょうか。たまたま「オープンチャーチ」の案内を手にして興味本位でおいでくださった方。散歩していたら、教会の前で呼び止められて、中に入ってみたいという方。そのような方々を、わたしたちは、歓迎いたします。もちろん、教会に求める者があっておいでの方も、祈りをささげるために来られた方も歓迎しますが、たとえ、特別何を求めるわけでもなくおいでの方も、祈りをするつもりもなく来られた方も、歓迎いたします。

普段どおりの生活の中では立ち寄ることがなかったかもしれないのに、その道を外れて敢えておいでくださった教会は、どのような場所に映っているのでしょうか。不思議な光景なのではないのでしょうか。ここは、特別立派な会堂ではありませんが、他のすべてのキリスト教会と同じく、二千年前に中東の地で始められて絶やすことなく受け継いできた祈りを続けているところです。国が変わり、言語が置き換えられ、少しずつスタイルも違って来ているかもしれませんが、ずっと燃え尽きることなく続けられてきた祈りが、ここにはあるのです。

「この不思議な光景を見届けよう」と、興味本位でおいでくださったかもしれない皆さん。ここは、聖なる場所です。ここに入って来て、履物を脱ぐわけでも、身を清める行為をするわけでもありませんが、わたしたちは、ここを聖なる場所として、皆さんにご案内いたします。ここには、燃え尽きることのない祈りがあり、祈りの中でお会いする神がおいでくださっているからです。

遙かなる記憶

最初に朗読された「出エジプト記」は、およそ三千三百年前の時代の出来事として描かれているものです。モーセという人が、エジプトの地に寄留していたイスラエルの人々を、神の命令によってそこから連れ出し、神の示す約束の地まで導いていくという、壮大な物語が描かれていくものです。その物語の、ほぼ最初の場面が、朗読されました。

モーセは、イスラエルの人々の父祖とされるアブラハムの血筋を引く人です。アブラハムと言えば、聖書の中では「信仰の父」と呼ばれる代表的な人物です。そのような家に生まれた人であれば、モーセも、さぞかし生まれながらの信仰に生きた人だろうと思われるかもしれませんが、聖書は、そのように描いてはいないようです。少々複雑な誕生の経緯がありますが、モーセは、エジプトに移住し、当時は「ヘブライ人」と呼ばれて蔑まれていたアブラハムの子孫たちの一人として生まれましたが、アブラハムの信仰から受け継いだものは、ほとんど与えられていなかったようです。アブラハムの信仰のしるしとされた「割礼」も、モーセは、誕生したときに受けていません。代わりに、誕生してすぐに、エジプトの王女の子として育てられるようになったのです。エジプトの王家の教育を受け、ファラオの宗教に従って成人し、生きるようになっていたのです。ところが、四十歳でそのような生活を離れ、エジプト人や同胞のいるエジプトの地からも離れて、荒野で羊飼いの生活をするようになります。そのモーセが、羊の群れを追う道すがら、不思議な燃え尽きない柴の光景に目を奪われて立ち寄った先での出来事。それが、今日朗読されたところで描かれていた場面です。

わたしたちは、現代の個人主義が広く行き渡っている時代にあっても、宗教というものを「家」のものとして受け継ぐという考えを、なお持っていることの多いのに驚かされることがあります。逆に言えば、「家の宗教」というものがないと、自分の宗教、自分の信仰というものが、まったく曖昧になってしまうのです。そうであっても、わたしたちは、なお、自分の決断をして一つの信仰を自分のものにすることがあります。あるいは、決断というような大それたことではないとしても、何か自分の土台になるような信仰のあり方に惹かれ、導かれていくという経験をするところがあるでしょう。仮に信仰の家庭に生まれた場合であっても、あらためて、自覚的な信仰体験をすることは、少なくないのです。

そのような経験を通して信仰を自分のものにしたときに、わたしたちは、もしかすると、自分で自分の信仰を獲得し、自分のものにした、と考えるかもしれません。いわば、知識の体系や人生哲学、あるいは信念のようなものとして、そこに到達するのが、信仰を身に着けることだと、考えるのです。

けれども、聖書がわたしたちに教えるのは、どうやら、そのような信仰ではないのです。むしろ、あまり自覚的にでもなく、決断とか努力とかでもなく、わたしたちのもとにもたらされる信仰がある。それは、あたかも、古い古い記憶が呼び覚まされて、大切な、忘れてはならない人のことを思い起こし、心とらえられていくようなものとして経験されるものなのかもしれません。

その名は何？

モーセという人は、このとき八十歳であったといわれます。エジプトを離れて四十年、ミディアン人という、これもまたアブラハムを先祖とする人たちの中の祭司の家に身を寄せ、羊飼いと暮らしてきました。祭司の娘と結婚していますから、あるいは、その祭司である舅を通して、古い古いアブラハムから受け継いだ信仰の何某かを聞いていたかもしれません。けれども、少なくともこの場面、八十歳になるまで、モーセは、神を知らずに生きてきました。自ら神の存在に目を向け、神を求めるような生き方をするには、ありませんでした。

そのモーセが、たまたま道をそれて立ち寄った不思議な光景の中に、モーセの名を呼ぶ存在があることを見出すようになったのです。その存在は、みずから「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と名乗るお方でした。もちろん、この場面は、テレビの取材班が同行していたわけではありません。モーセ自身の語った体験談がもとになっている、と言うべきでしょう。事実、そこで何が起こったのか、客観的に言うことはできないのです。けれども、モーセは、間違いなく、この体験をしました。「わたしはあなたの父の神である…」と名乗られる神と出会う体験をした。この体験が、モーセのこの後の人生にとって、決定的に重要な体験であった、というのです。

「わたしはあなたの父の神である」。モーセは、アブラハムやイサク、ヤコブの時代からすれば何百年も後の人です。それどころか、モーセは、自分の父親のことさえ、ほとんど知らなかったかもしれません。母親は、エジプトの王女に乳母として召し入れられたと語られています。幼少のころのモーセが父親と接する機会はほとんどなかったでしょう。その父のことを持ち出されて、「あなたの父の神」と名乗られたお方。モーセがこのときに出会ったと信じた神は、モーセの自覚でも求めでもなく、それよりも前から、モーセの父のときから、モーセと出会うお方としてくださっていたお方だった。モーセは、そのことに気づいたのではないのでしょうか。

わたしたちは、神の名を知りません。モーセがその名を尋ねたとき、神は、「わたしはある。わたしはあるという者だ」という謎めいた言葉でお答えになりました。主イエスを信じるわたしたちは、主イエス・キリストという名を神の名の代わりにお呼びします。しかし、真の神の名は知らないのです。それでも、わたしたちは、その名をはっきりと知らぬお方を、大切なお方として記憶し、思い起こすことができるのです。それは、そのお方が、わたしたちよりも先に、わたしたちを憶え、名を呼び、お会いくださろうとしているからです。主イエス・キリストは、そのような神をただ「御父」とお呼びする祈りを、わたしたちにお教えたのです。

「あなたの名は？」。この問いを向けるお方を、わたしたちは、聖なる場所、ここ教会で見出すでしょう。道をそれて立ち寄った聖なる場所は、神の名を尋ね、神とお会いする場所です。お会いすれば、この方のことは必ずわかるでしょう。すでに神が、はるか昔から、わたしたちにお会いくださっているからです。